



### 「36歳の大学院生」

(有) 山口不動産鑑定所専務取締役・不動産鑑定士

山口 和範 (平成元年卒)

2006年4月、私は「早稲田大学大学院ファイナンス研究科」に入学した。「遅れてきた大学院生」と友人に揶揄されたこともあったが、平均年齢は33～34歳、新卒の学生は数えるばかりで、ほとんどがビジネスの第一線で活躍している面々である。

場所は日本橋で、COREDOの5Fワンフロアがキャンパスとなっている。私は東松山から片道1時間半をかけて週4日(平日夜間3日+土曜日)通学している。

学生の内訳は、半数以上が銀行、証券、生・損保等の金融機関で、ほか商社、外資、弁護士、公認会計士、税理士、FP、国家公務員、留学生等様々な業種にまたがる。メディアで見掛ける人もいる。このように、学びの場が同時に異業種交流の場となっている(ある日の債券の講義で隣に座った人が川高の後輩だった時は驚いた)。

教授陣も錚々たる面々で、不動産ファイナンス分野の第一人者で、私が師事する川口有一郎教授をはじめ、超整理法の野口悠紀雄教授、道路公団民営化委員で元マッキンゼーの川本裕子教授等々(当初は堺屋太一教授も学督として教鞭をとっていたが、1年前に引退)。ほかにも著名な実務家教員等が最先端の内容を講義してくれる。

科目は、米国のビジネススクールでも使われているテキストをベースに、コーポレート・ファイナンス、エクイティ・インベストメント、デリバティブ等でファイナンス理論の基礎を叩き込み、不動産分野で証券化、J-REIT、投資分析、金融工学、リアルオプション等、90年代後半からの不動産市場の大きな変遷を受けた新興分野について学んでいる。

皆一様に勉学に燃えている。大学までは勉強と言えただ漫然とやってきたに過ぎないが、今はビジネスの現場に必要な、活きた学問を学べる喜びをひしひしと感じている。

まさしく人生の転機であった。不思議と目先の利益なんて簡単に捨てられた。見据えているのは10年、20年後の社会である。

来年3月、米国の卒業式スタイルであるアカデミック・ガウンを身にまもって晴れて「MBA」ホルダーとなれる日を心待ちにしている。たぶん泣く。仕事やボランティアの合間をみて勉学に打ち込み、帰りの満員電車でも立ったまま復習し、帰ってから深夜(明け方)まで予・復習し、食べるように書物を読み、自分を相当追い込み、頑張ってきているからこそ、学位授与式の日には仲間と思いきり飲んで、思いきり笑って、そして思いきり泣きたい。